

伊豆森林管理署 署長が語る

令和4年7月 森實祐子

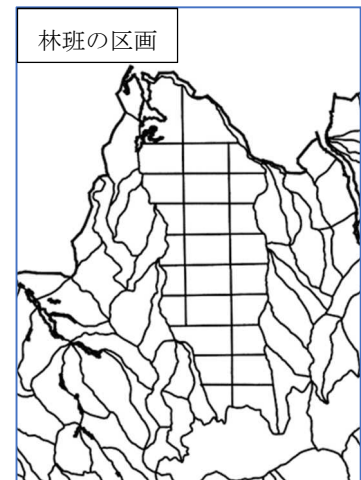
はじめに

伊豆森林管理署の「署長等が語る」も今回が3回目になります。署の取組の概要については平成28年8月に金井署長が、歴史については令和元年12月に上條署長が書かれていますので、今回は、トピックスを中心に記載したいと思います。

1 火山の恵み（神代木）

伊豆森林管理署では、伊豆半島地域の国有林17千haを管理しています。では、この国有林をどのように把握しているかという、林班と呼ばれる区画に分けて、番号を付けています。そしてこの区画は、通常、尾根や沢等の自然地形が境になるのですが、管内に境が直線になっている区域があります。

（右図）この部分だけ突然直線なので、不思議に思い、赴任当初に聞いてみると、軽石地帯とのことでした。軽石といえば、最近、海底火山の噴火で出た海の軽石が話題になりましたが、ここでの軽石は、地上を流れた溶岩でした。調べてみると、天城山の稜線の近くにあるカワゴ平という窪地から、約3200年前に流出したとのことでした。



伊豆半島で火山というと、伊東市の大室山が有名ですが、このカワゴ平の噴火は、伊豆高原や城ヶ崎海岸を作った大室山の噴火より規模が大きかったそうです。

実は、伊豆署の玄関に、このカワゴ平の噴火に関係した物が展示されています。それは、幅が1m以上はあるヒノキの板で、平成10年に治山工事の現場から発掘されました。

カワゴ平の噴火では、溶岩流出の前に火砕流が起き、下流の筏場（いかだば）の周辺までを埋め尽くしたそうで、ヒノキはこの火砕流に埋もれたものです。

噴火等があれば、木は燃えるので、森林等は焼失してしまうのではと思いますが、木が太い等には残る場合があります。神代木とは、火山噴火や洪水等で、長い間埋もれていた木材をいいます。



署の玄関の神代ヒノキ

発掘当時の現場写真がありますので、色が見にくいですが、ご覧ください。また、同時にスギも発掘されていて、右下が当時の修善寺貯木場での写真になります。



平成10年の発掘現場



平成10年の発掘されたスギ

伊豆市湯ヶ島の昭和の森会館（「道の駅天城越え」）内の森林博物館では、このヒノキとスギの両方を見ることができます。神代木には、独特な風合い等があり、建築用材や工芸品等に珍重され、筏場では、昭和のはじめ頃まで、神代木の発掘が盛んに行われていたそうです。



森林博物館展示の神代スギ



伊豆市資料館（上白岩）の神代スギ

軽石地帯の現況はというと、緩やかな傾斜の地形が続く森林になっています。ただ、地表には、まだ岩がごろごろしており、昔は、苗の植栽時に、客土をしていたそうです。



軽石地帯 なたらかな地形



軽石地帯 岩がごろごろ

2 火山の恵み（石材）

さて、伊豆半島は、かつては、この神代木のように巨木が生育していて、船材や寺社の建築用材の産出地として知られていました。江戸時代には、江戸城の修復にも使われ、例えば、安政7年（1860年）には、アカマツ角材（長さ3間半以上・厚幅とも2尺以上の角物）、ヒノキ板、マツ厚板等が使われたとの記録があります。しかし、江戸城全体として見た場合には、伊豆半島は、木材というよりは、石材の産地としてより重要であったのでは、と思います。

徳川家康は、江戸開府の後、天下普請（全国の諸大名に土木工事を行わせること）により、江戸城の拡張工事を始めます。この工事には、石垣を作るための膨大な量の石材が必要で、そのほとんどは、伊豆産であると言われています。というのは、伊豆半島は、その稜線部分に古い火山が連なっていて、安山岩系の硬質な石材の産地なのです。諸大名は、伊豆の各所に、石材の切り出し場（石丁場という）を設け、船で江戸まで運びました。最盛期には、3千隻の船が、月に2回、伊豆と江戸の間を往復していたとのことでした。

東伊豆町の伊豆急行線の伊豆稲取駅前には、石材（江戸城築城石）の展示ひろばがあり、運搬や加工のようす等を見ることができます。また、切り出しはしたものの、江戸まで運ばれなかった石も残されており、東伊豆町の役場の前には、寄贈された石が展示されています。



伊豆稲取駅前の展示



加工のようすの展示

石丁場については、最も保存状態がよいとされるのが、国の指定史跡の早川石丁場跡です。遺跡の保存のため、道路を架橋にした箇所があります。近くに豊臣秀吉の石垣山一夜城がある場所なので、当時から、石材の産地として、知られていたのだらうと思います。



東伊豆町役場前の石材



早川石丁場跡

3 旧依田邸

管内の松崎町に行った際、下田方面に通じる大沢付近の道路際に「依田之庄」というノボリが何本もあるのが目につきました。「依田之庄」は、日帰り温泉なのですが、その隣に静岡県の指定文化財になっている旧依田邸がありました。調べてみると、依田家は、江戸時代に代々名主を勤めた旧家で、明治時代には、当主の佐二平が製糸業で成功し、弟の勉三は北海道に・・

「依田」と聞いただけでは、わからなかったのですが、勉三と聞いて、すぐに思い出しました。依田勉三は、北海道の帯広開拓の祖で、地元で最重要な偉人なのです。私事ですが、帯広の赴任経験があったので、忘れられない名前でした。これも縁ですので、早速、訪問しました。



県の指定文化財



依田邸の母屋



依田邸内の和室



勉三の展示もありました



裏庭となまこ壁の蔵

依田勉三は、開拓団（晩成社）により入植し、酪農やバター製造等様々な事業の先駆者になります。

北海道のお土産に、この開拓をモチーフにしたお菓子がありますので、みなさんもお存じではないかと思います。

なお、なまこ壁は、土蔵などの壁に平瓦を張り、その目地部分を漆喰で盛り上げる独特な塗り方で、松崎町のほかに下田市でも見られるそうです。

4 最後に

現在の伊豆森林管理署の庁舎は、伊豆市湯ヶ島から現在地（伊豆市牧之郷）に平成18年に移転しましたが、旧庁舎の跡地が「しろばんばの里公園」として、整備されています。「しろばんば」は、昭和を代表する作家、井上靖の自伝的小説で、井上靖は幼少期を湯ヶ島で過ごし、生家は、旧庁舎のごく近くにありました。現在、生家は、「道の駅天城越え」内に移築されていますが、井上靖の本家にあたる上の家は、この公園の向かい側に保存されています。



工事中の公園



上の家 公園は左手奥

もう、長くなりましたので、このあたりで終わりますが、伊豆は観光地なので、トピックスに興味を持っていただき、観光がてら、訪れていただければと思います。

特に、「道の駅天城越え」には、井上靖の生家のほか、神代木も展示されています。また、実は、江戸時代に植栽された御礼杉も間近に見ることができます。下の写真の真ん中のひととき大きな木ですので、見てもらえればすぐにわかります。道の駅で休憩される場合には、是非、ご覧ください。（御礼杉については、令和元年12月の「署長が語る」p5を参照ください。）



昭和の森会館の正面から、御礼杉は中央の大木